

余白挿絵詩篇の絵画化の方法

——11世紀写本に見られる重層化の傾向について

早稲田大学大学院 辻 絵理子

挿絵を施すとは、ただ文章を絵に置き換えるという作業ではない。

ビザンティン世界に9世紀から作例の残る余白挿絵詩篇は、綴じ側上方にテキストを寄せて書くことによって生じさせたL字型の余白に挿絵を配する一連の写本群である。この形式は予め用意された余白の、対応するテキストのすぐ近くに挿絵を描く。これは、形式上どうしても扉絵的な役割を果たすことになる全頁大挿絵や、事前のレイアウトが必要となるコラム・ピクチャーにはない特徴であると言えよう。レンマ記号、リンク・マークなどと呼ばれる記号を用いて、対応するテキストを指し示す箇所が多く見られることから、制作者や鑑賞者がテキストとの関係を重視しながら挿絵を描き、また鑑賞したと判る。

このような特徴を持つ写本におけるテキストの絵画化の方法について、先行研究においてはリテラル、タイポロジカル、ヒストリカルといった分類が指摘されてきた。リテラルは文字通り、テキストを絵画化したものである。「風が吹き飛ばす」とあるテキスト近くに風の擬人像を配するなどする。タイポロジカルは旧約の本文を、挿絵によって新約の予型であると指し示すものである。使徒言行録における十二使徒の欠員補充場面に引用された詩篇章句に、ユダの自害とそれを見るマティアを描く例が挙げられる。ヒストリカルは、聖像破壊運動のような歴史的事実に、キリスト伝などを重ねる。キリスト磔刑の予型と解釈される章句に、キリストの磔刑場面のみならず、石灰に浸した海綿でイコンを塗り潰すイコノクラストたちを対比させて描く手法などである。

これらの分類によって、余白挿絵詩篇の各挿絵の主題と、結びつけられたテキストとの対応関係は概ね明らかにされたと言って良い。しかし一つひとつの対応関係のみでは説明のできない挿絵や、時代が下るにつれて加えられた変更がある。本発表では、1066年に制作された『テオドロス詩篇』(BL, Add. 19352)を例に、上記の分類以上の要素を併せ持った、もうひとつの絵画化の方法について検討する。